アルネの譜面

カドクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルネの譜面

【Ｎコード】
Ｎ２４４１Ｃ

【作者名】
カドクラ

【あらすじ】
見知らぬ異世界で出会った美女は母親となり、その娘は妹となる。そして、主人公司は高校生から軍人養成所の生徒となる。※作者が続きを書ける文章力をつけるまで、更新停止

第1話　不思議な親子　1

木でできた小さい椅子に座り、司を心配そうに見つめる女性がいた。

ぱっと見た感じは司と同じ15、6才に見えるのだが、彼女からはどこか熟した雰囲気が漂っている。黒い無地のワンピースの上に、真っ白いエプロンを身に着けた彼女は前のめりになり、心配そうに司を見つめている。

司は彼女の見たこともないような美しい顔を見ると、思わず顔が赤くなってしまう。

漆黒の長い黒髪と透き通るような白い肌がとても印象的だった。整った輪郭の中にある、少し垂れた大きな目が、赤くなった司を不思議そうに見つめている。

恥ずかしくなった司は慌てて彼女から目線を逸らす。すると、司の視界に自分に掛けられた毛布が入り、自分がベットの上にいるのに気がついく。

司はゆっくり身を起こし、辺りを見回す。机や椅子、壁や天井まで全て木で造られており、電球やテレビなどは見当たらない。まるでキャンプ場にある質素なログハウスのような場所だった。

彼女は微笑みながら、司に優しく話しかける。

「ここは私の家よ。それより、体は大丈夫？」

「え？」

キョロキョロしていた司は再び彼女の方を向く。

「覚えてないの？あなたをここに召喚したとき、あなたは凄い怪我で、血まみれだったのよ」

怪我のことも、召喚のことも、司は全く分かっらない。

なぜなら、司に大きな怪我をした覚えなど全く無い。それに、召喚とはなんなんだろうと司は首を傾げる。

「まぁいいわ。怪我の治り具合を見たいから、服脱いでくれる？」

呆然としていた司は、言われた通りに着せられていた木綿でできた質素な服を脱ぐ。
服を脱ぐと司の華奢な体があらわになる。しかし、怪我をした痕跡など全く無い。
それでも彼女は真剣な面持ちで、司の体に手を伸ばす。
「ちょっ！？」
司の体に彼女の手が触れると、彼の顔が茹でタコのように真っ赤になってしまう。
彼女は逃げようとする司を少々強引に押さえ付け、両腕と胸元を丹念に調べる。その間、司はビクビクと反応していた。
「うん、もう大丈夫そうね」
彼女の表情が和らぐ。
一方の司は、彼女に体を触られて、心臓が胸に手を当てないでも鼓動が聞こえるほど激しく動いていた。女性経験が全く無い司にとって、少し刺激が強すぎたようだ。
彼女はそんなこと気にもせずに、司に脱いだ服を着せてやろうとする。
「じ、自分で着ます！」
司は乱暴に服を取り上げ、慌てて服を着ると、彼女は少し名残惜しそうに彼を見つめる。
「じゃあ、あなたの名前と年齢を聞かせて」
「えっと、司です、藤本司。年齢は１６です」
司は彼女から目線を外し、少しうつむく。
「ふ～んツカサか……じゃあ、今日からはツカサ・ナップ・ベイリーフね」
「え！？」
司は思わず彼女の方を向く。そして、藤本司だって言ったのになと司は思う。
しかし、彼女は間を開けずに話を続ける。
「私の名前はアルカディア・ナップ・ベイリーフ」

アルカディアと名乗った彼女は不気味な笑顔を浮かべ、司を力強く指差す。
「今日からツカサは、私の息子だからね！！」
「えぇ！？」
司はアルカディアの迫力にたじろぐ。
「あ、明日からツカサはガテイスト学園に入学が決まってるからね」
「えぇ！！？」
ガテイスト学園が何かはよく分かってはいないが、さらに動揺する司の姿を、アルカディアはいたずらっぽく笑いながら眺めている。
しかし、司はアルカディアに遊ばれていることにも気付づいていない。ただ今起こっている急激な新展開に、着いていこうと必死だった。
「あの、ガテイスト学園ってなんですか？」
「えっと、軍人の養成所みたいな感じかな」
「軍人ですか！？」
司は普通の高校生。武術なども習ってもいなかったし、運動神経もいい方ではない、もちろん体格もよくない。軍人などとは掛け離れた存在だ。
「しかも、多くの有名な軍人を産出している超エリート校なの。入学させるのも大変だったんだからね」
突然見知らぬ場所にいて、突然見ず知らずの人の息子にさせられて、学園に入学まで決まっている。こんなことは現実では有り得ない。
ということは、必然的にこれは夢ということになる。目の前にいる女性と別れるのは淋しいけど、もう驚くのには疲れた――早く夢の世界から、現実世界に戻りたい！司は声には出さず、心の中でそう叫んだ。
司は少しうなだれ、顔を上げると、今までに無い真剣な表情になっていた。
「これ、夢ですよね？」

「いいえ、紛れも無く現実よ」
アルカディアはにっこりと笑って、はっきりと言う。司はアルカディアのあまりにもはっきりとした口調に少し驚く。
「でね、もうすぐアルネが帰って来るから、行く準備しといてよ」
「え？行くってどこに？」
またアルカディアは驚きの発言をするのだろうと思い、司は心の準備をする。
今の司には、目の前に猛獣を出されても驚かない自信があった。
司は自信に満ちた目で、じっとアルカディアを見つめる。
「行き先はもちろんガテイスト学園よ」
ここは司の予想どうりだったので、驚くことは無い。
そして、次に新しく話に出てきたアルネという言葉をアルカディアに尋ねる。
「じゃあ、アルネっていうのは？」
恐る恐る尋ねたあと、司は生唾を飲み込む。
アルカディアはそんな司に、再び指差す。
「アルネは私の娘、今日からはあなたの妹よ！！！」
「い、妹ですか！？」

第1話　不思議な親子　1（後書き）

初小説～
感想ください～

第1話　不思議な親子　2

司は戸惑っていた。
無理もない、いきなり「あなたの妹よ！！」と言われたんだ、混乱しない人はいないだろう。
しかし、司の心には少しだけの期待もあった。こんな美人な人の娘は、きっと美人なんだろうと。そして、美人な妹ができるのが嬉しくない訳がない。
だが、そんな大切なことを簡単に決めちゃって良いんだろうか。というよりも、相手側の承諾は取っているんだろうか？――いや、取ってない。さっきの様子を見た限り彼女は絶対にとって無い――そんな自問自答を、司は何度も繰り返す。
そんな司の気持ちを知ってか知らずか、アルカディアは悲し気な顔付きになる。
「嫌なの？」
アルカディアは椅子から立ち上がり、その美しい顔を司の顔に近づける。その離はわずか１０ｃｍほど、司は顔を赤らめると共に息をぐっとこらえる。
アルカディアは恥ずかしがる様子も無いが、司は恥ずかしすぎて心臓が爆発してしまいそうだった。
司が後ろに下がればアルカディアも一緒に下がり、彼が横を向こうとすれば彼女の手がそれを阻み、彼が下を向こうとすればそこには彼女の胸がある。
まさに逃げ場の無い、四面楚歌。このままでは死ぬかもしれない、そう司の頭によぎる。現に司の心臓は異常なほどに鼓動し、頭もくらくらしてきていた。
アルカディアは少し潤んだ目で司を見つめ、手をぎゅっと握りしめる。
「ねぇ、嫌なの？」

今の状況で司が断れる訳がない。
「い、嫌じゃないですから、離れてください！」
司の心からの叫びだった。しかし、アルカディアは彼から離れることはない。むしろ、さっきより近づいていく。
「親子なんだから、恥ずかしがらないで」
「ええぇっ」
司は今にも抱き着いてきそうなアルカディアを押さえる。だが、彼女は止まらない。
アルカディアの目は、さっきのように潤んでいない。今は獲物を狙う狩人の目になっていた。
「親子のスキンシップは大切よ」
その目を見て、司は覚悟を決めた。目をつむり、押さえることも止める。
それを見たアルカディアは、おもむろにエプロンを外し、彼に抱き着く。
「……なにしてるの、母上？」
部屋の入口に一人の少女が立っていた。ベットの上の二人は、同時に少女の方を向く。
「あら、アルネちゃん」
自分の母親がベットの上で男に抱き着いているにも関わらず、アルネと呼ばれた少女は驚きもしない。母親も母親で、自分の娘が来ても司を離そうとしない。
アルネの登場により、司の赤かった顔がさらに赤くなっていた。司は慌ててアルカディアから離れる。
「だ、誰ですか？」
司の額からは冷や汗が滝のように溢れ出て来ていた。一方のアルカディアは司に逃げられて、つまらなそうな顔をしている。
「言ったじゃない、アルネちゃんよ。あなたの妹」
アルカディアは少し怒ったような口調だった。
「……彼女がそうなんですか」

アルネは母親とは違った、赤茶色をした肩にかかるほどの美しい髪と、鋭く吊り上がった大きな黒い瞳を持っていた。身長１５０ｃｍくらいの華奢な体つきをしたアルネは、母親と同じく無地の黒いワンピースを着ている。
やはりアルネも目が覚めるような美少女だ。
すっかりアルネに見とれている司を、彼女は不思議そうに見つめる。
「この人は私の兄上なの？」
そう言うと、ベットの上で不機嫌そうに司の隣に座っているアルカディアの方を向く。
「ええ。１６才だから、アルネちゃんより１つ上のお兄ちゃんよ」
「わかった」
アルネは興味がなさそうな表情で頷く。司はそのあまりにも興味のなさそうなアルネに少しショックを受けていた。
「名前はツカサっていうのよ。どう、カッコイイでしょ？嬉しいでしょ？」
「うん」
アルネは気のない返事と共に頷く。
「さぁ、アルネちゃんも、ちゃんと自己紹介しなさい」
アルネは頷くと、ベットの上にいる司へと歩み寄る。それを見た彼は、ベットから勢いよく立ち上がる。
ベットの前で立ち尽くす司に、一歩一歩とアルネは近寄る。彼女が近寄くたびに彼の心臓は鼓動を早めていた。
司とアルネが向かい合うと、彼の心臓は今日2回目の破裂の危機を迎える。しかし、それでも司は、ついアルネに見とれてしまう。
司よりも１０ｃｍ以上背の低いアルネは、そんな彼を無表情で見上げていた。
「アルネ・ナップ・ベイリーフ、１５才。よろしく、兄上」
「あ、えっと、藤本司です。よ、よ、よろしくね、アルネちゃん」
冷静なアルネとは違い、動揺丸出しで喋る司の姿は、とてもアル

ネより年上とは思えない。
そんな対象的な2人の姿を、ベットの上のアルカディアはおもしろそうに眺めている。
「アルネでいい」
アルネはそう呟くと、じっと司を見つめる。その目は何か言いたそうな目をしていた。
「えっと……」
「ほら、名前を呼んで欲しいのよ、お兄ちゃんに」
司は一瞬戸惑うが、ぎゅっと拳を握りしめ、アルネの目を見る。
「あ、あの、その、あ、えっと、あの、あ、あ、あ、あ、アルッ……」
その場の空気が凍り付く。
「そ、その、よろしくね、アルネ」
アルネは無言で頷く。司にはその顔は少しだけ赤らんでいるように見えた。
すると、ベットの上でくすくすと笑っていたアルカディアが、ベットから勢いよく飛び下りる。
「じゃあ、そろそろガテイスト学園に行こうか、2人共！」
「え、どうやって行くんですか？」
「アルネちゃんがね、馬車借りて来てくれたから、それで行くの」
そう言うと、アルカディアは歩き始める。慌てて、司とアルネもそれを追う。

第1話　不思議な親子　3

3人が家から出ると、透き通るような晴天の空が広がっていた。空に浮かぶ太陽は、家の周りに生える木々を照らし、絵に描いたような綺麗な風景だ。

真っ先に家から飛び出したアルカディアが気持ち良さそうにぐーっと背伸びをすると、アルネも同じように背伸びをする。しかし、アルネはその間も無表情のままだ。

背伸びを終えると、アルネは振り返り司の方を向く。アルネの白い肌が日の光で照らされて、雑誌の一面を飾るモデルのようだった。司は思わずぐっと息を呑むと共に、その姿を脳裏に焼き付ける。そして、絶対に忘れないと心に誓う。

アルネは司から送られる熱い視線にも表情を変えることは無い。一方のアルカディアは司に向けて冷やかな視線を送っていた。

そんなこと気にもしていないアルネは、司の木綿で出来た質素な服の端を摘む。

すると、司はハッと我に返る。

「ど、どうしたの？」

「……このボロい服で行くの？」

「う、うん」

慌ててうなずく司を、アルネはひたすら見つめる。無論、司の顔は真っ赤だ。

「あ、そういえば！」

「ど、どうしたんですか、アルカディアさん？」

突然声を上げたアルカディアは、司の言葉なんか気にもしない。強引にドアの前にいる2人を押し退けて家の中へと駆け込む。司は唖然としてその場に立ち尽くし、アルネは表情は変えずに溜め息をつく。

「げ、元気なお母さんだね……」

「うん」
「ふ、ふ、普段からあんな感じなの？」
「うん」
「た、た、た、大変でしょ？」
「うん」
司は精一杯の勇気を振り絞って口を開いたものの、アルネに軽く流されてしまう。司はなんとなく恥ずかしくなった。こんなことになるなら、もっと普段から女の子と話をしておけば良かったと司は嘆く。
アルネとアルカディア、容姿も性格も全く違う2人の共通点それは――美人な事と絡み難いこと、1週間に1回程度しか女の子と話さない自分には荷が重い。司はそう思った。
そんな司の気持ちを知らないアルネは、ぼーっと空を眺めていた。やっぱり、その姿も可愛い。つい司は見とれてしまう。少し絡み難いけど、こんな可愛いアルネが自分の妹になると思ったら司は嬉しいかった。それはもう、あやうく踊りだしてしまいそうになるほどに。
「なに、兄上？」
司の熱すぎる視線に、アルネが口を開く。
突然話しかけられて焦る司は、誰が見ても分かるほど動揺していた。
「そ、そういえばさ、僕のことも名前で呼んでよ！兄上って堅苦しいし」
アルネが再び空を見上げる。
「……まだ、名前は恥ずかしい」
「そ、そうだね」
兄弟とはいっても、しょせんは今日会ったばかりの他人だ。アルネの意見は普通だろう。
だが、司は自分だけ恥ずかしい思いして名前で呼ぶのは少し不公平な気がした。しかし、そう思ったのも一瞬だけで、空を眺めるア

ルネの顔を見たらどうでもよくなってしまう。
それにしても、兄上って呼ばれるのもちょっと恥ずかしいと司は思った。
「……うん」
アルネはそう言うと黙りこくってしまう。
その場には、どうにも話しづらい空気が流れる。司にとってそこは、とてもとても居心地が悪い。
アルカディアさん、さっきは絡み辛いなんて言ってごめんなさい。速く帰ってきてください。この空気に押しつぶされてしまいそうです。本当に。司は何度も何度も誤る。
しかし、人生そんなに甘くなかった。心の中で何度誤ろうが、声に出さなければ相手には伝わる訳がないが、司に「アルカディアさん、速く帰ってきてください」と言えるほどの勇気も無い。今の司には、ただ待っていることしか出来なかった。

――3分後

家の中から、アルカディアが走ってくる音が聞こえてくる。
司にとって、その音はまさに天の助け。司はとても嬉しそうな表情になっている。一方のアルネは少しがっかりしていたようだった。
「ほら、ツカサ。あったよ！」
彼女の手には、丁寧に畳まれた黒い洋服があった。
それを、アルカディアは満面の笑みで司に押し付ける。
「ちゃんと、血も落としておいたからね」
「……これって」
アルカディアに渡された黒い洋服。それは、紛れも無く司の通っていた高校の学生服だった。
司はズボンを一端アルカディアに渡すと、慌てて上着を広げる。
やっぱり、間違い無かった。
司が戸惑いながらも何かを思いた様子で、制服のポケットに手を

突っ込む。司の思った通り、そこからは彼の青い携帯電話が出てきた。他にも司が最近買った携帯音楽プレーヤーとイヤホンが入っていた。

とりあえず司は、携帯電話を開く。電源は付いていて、普通に稼動していた。変わったところといえば、バッテリーが2つしかないところと、3本あるアンテナが1つも立っていないところだけだ。

それをアルカディアが興味津々に覗き込む。覗き込むまではしないものの、アルネも興味があるようでその様子を眺めている。

「ねぇ、それなんなの？」

「携帯電話です、僕の」

司はそう言いながらも、メールを送ってみたり、インターネットに繋いでみたりといろいろと試していた。

しかし、アルカディアには携帯電話という単語の意味が分からないようだ。不機嫌そうに、顔をしかめている。

「ねぇねぇ、なんなのそれ？」

「ちょっと待ってください」

「……もういいわよ。アルネちゃん、こんな無愛想なお兄ちゃん無視して2人で行きましょ」

「え？」

突然話を振られたアルネは少し驚く。

そんなアルネの手を強引に引いて、アルカディアは歩き始める。

それでも司は、その場で携帯電話とにらめっこをし続けていた。

「兄上……」

「いいの、母親の言うこと聞かない子なんか」

そう言いながら、アルネを連れて早足で歩いていく。

歩き始めてから1分もしない内に木々は見えなくなった。すると、その代わりに畦道が敷かれている。

そこには、アルネが借りて来た馬車が置いてあった。その2頭の栗毛馬が、退屈そうに鼻先で地面をいじっている。後ろには白い布

がかけられた、人が４人ほど乗れるの小屋のような台車が繋がれていた。
アルカディアは手を離して早速、台車に乗り込もうとする。
すると、今度はアルネが離された手で、アルカディアを掴む。
「……母上」
アルネはじっとアルカディアを見つめる。
口は開かない。ただ、ひたすらに見つめ続ける。
アルカディアは少したじろぐが、それでもアルネはお構いなしに見つめ続ける。
やがて、根負けしたアルカディアが大きくため息をつく。
「わかったわよ、アルネちゃんがそう言うなら……」
アルカディアは不機嫌な顔付きのまま走り始めた。アルカディアは足がとても速く、その姿はすぐに見えなくなる。
アルネは台車に腰掛けて、空を見上げた。相変わらず空には雲一つ見当たらない。吸い込まれるように青い空を見ていると、時の流れを忘れてしまいそうだ。
「ただいま！」
その声に、アルネはゆっくりと目線を元の位置に戻す。すると、目の前には肩で息をするアルカディアは、しっかりと司を捕まえている。
「アルカディアさん、痛いです。離してください！」
「うるさい！」
アルネは再び空を見上げる。

第2話　合格

あぜ道を進む馬車の中に、司はいた。アルカディアに渡された学生服は着ておらず、畳んで隣に置いてある。

もう、司の手に携帯電話は持たれていなかった。いろいろと試したが、電波が来ていないようなので誰とも連絡は取ることは出来ない。出来ることといえば、携帯に入っているゲームとデータホルダの中を見ることぐらいだ。なので今は、電源を切って大切に学生服のポケットにしまってある。

今、司の手には携帯音楽プレーヤーが握られている。なにせ司の小遣い3ヶ月分の12000円もした高価なものだ。壊れてないか丹念に調べていた。

そして、司の真正面には、恨めしそうに司を見つめるアルカディアが座っている。

司はそれに気付いているものの、恐くて顔を上げることはない。

馬車の中には微妙な空気が漂っていた。

先頭では、アルネがそんな2人には目をやることも無く、本を読みながら手綱を引いている。

やがて、司が携帯音楽プレーヤーが壊れてないことを確認すると、電源を消す。そして、ちらっと真正面に座っているアルカディアの様子をうかがう。

気付いたアルカディアは、殺気漂う表情で睨み付ける。その表情を見ると、出会った時の優しそうなアルカディアと同じ人とは思えない。

「なによ？」

「な、なんでもないです」

司は慌てて、再び電源の付いていない携帯音楽プレイヤーに目をやる。

アルネみたいに感情を表に出さない人と話すのも難しいけど、ア

ルカディアのように感情の起伏が激しすぎるのはもっと大変だ。早く機嫌が直ってほしい。
そう思いながら司は、真っ暗になっている音楽プレーヤーの画面を見ていた。
司が口を閉じるとアルカディアも黙り、場の空気は一気に重くなってしまう。
それに加えて、正面に座っているアルカディアの表情は険しいまま。これならば、空気が重くなるだけのアルネと一緒に居た方が、まだ居心地が良いと司は思った。
司はだんだんとその空気に耐えられなくなってきていた。すると、司は自然とこの場から離れるための、怪しまれないで、相手を傷つけない言い訳をシュミレーションし始める。
別に逃げ出すわけではないと、心の中でつぶやきながら。
「なに、ブツブツいってんのよ？」
司は自分でも気付かぬうちに、考えを口に出してしまっていたようだ。恥ずかしくて少し顔が赤くなる。
アルカディアは不思議そうに司を見る。
「なに？」
ここは何か答えないとアルカディアが怒ると思い、司は勇気をふりしぼって顔を上げる。そして、さっき思いついた言い訳を使う時だと思い、覚悟を決める。緊張で足は小刻みに震え、額からは汗がにじんでいた。
「いえ、あの。ぼぼ、僕ちょっと酔っちゃったんで、風に当たってきたいな～なんて思ったんですよね。あはは。あはははは」
小学生なみの演技を終えた司は、白々しく笑っている。
アルカディアは反応しない、ただ司を睨み付けていた。
返事が無いことをＯＫと思ったのか、気まずい空気の中、司はゆっくりと立ち上がる。そして、ふらつきながらアルネのいる先頭へと向かおうとする。
司は心の中で、ちゃんと言えた自分を何度も褒めていた。手は無

意識に、小さくガッツポーズをしている。
「待って」
「なな、なんですか？」
完全に安心していた司は、とても驚きながら立ち止まる。
「……私ね、人に話を無視されるのが大嫌いなの」
アルカディアはうつむいて、すねたように言う。
その様子に、司はきょとんとしている。
「えっ。僕、無視なんかしました？」
司の言葉に嘘はない。本当に心当たりが無かった。
その様子を見たアルカディアは、脚を抱え込み、顔をうずめる。
「……したわよ、さっき。ちょっと待ってくださいって言いながら、変なのに夢中だったじゃない」
「えっ、でも、無視は……」
「話を聞いてもらえないのが嫌なの」
アルカディアは顔を上げて睨み付ける。そして、自分の隣に来いと、床を叩く。
司はびくびく怯えながら、アルカディアの少し離れた所に座る。
２人の間の距離は５０ｃｍぐらい。微妙な距離があるが、なにせ初対面の相手だ。当然の距離だろう。それに、怖い顔付きをしているものの、アルカディアはとびっきり美しい。経験値の少ない司が、隣に座れる訳がない。
しかし、アルカディアはそれが不満なようで、機嫌が悪そうな顔をしている。
「あ、あの、ガテイスト学園までって、どのくらい時間かかるんですか？」
「３時間ぐらい」
今出来る精一杯の笑顔を作り話し掛けた司に、アルカディアは冷たく言う。

司は止めどなく出て来る汗を拭い、「結構遠いんですね」と苦笑いしながら答える。
すると、アルカディアは何かを考え、思いつめた表情で司を見る。
「……こう言うの恩着せがましいから、あんまり言いたくないんだけど」
「え？」
「召喚、回復、言語と文字の享受、洗濯、私はこれだけ沢山の魔法を使ったの。そのせいで私の魔力は空っぽ。この先、1ヶ月ぐらい魔法を使えないの」
「はぁ」
魔力や魔法などの不可思議な単語に疑問を抱きながら、司は気の無い返事で答える。
魔法なんかゲームの世界以外でありえない。やっぱり、ここは夢の世界なんだろうかと司は考えていた。
すると、不意にアルカディアが司の隣に来て、肩に寄りかかる。
「全部、ツカサのせいなんだからね」
さっきまでとは一転、子猫のように甘えた声をだす。それと同時に司の顔が真っ赤に染まる。
「ななな、なにしてるんですか！？」
司が慌ててアルカディアを振りほどこうとする。
しかし、逆にアルカディアが力ずくで司を押し倒す。すると、アルカディアが司に馬乗りする体勢になった。
アルカディアの頬が赤く染まる。
「キスしてくれないと、ゆるさないんだからね」
「はぁっ！？」
司はアルカディアを押し返そうとするが、全然動かない。アルカディアの方が格段に力が強いようだ。
何度も抵抗をしているうちに、アルカディアが司の手をつかみ床に押さえつける。

アルカディアが顔を近付けると、司の鼓動の音が外に漏れるほど大きくなる。今日の司の心臓は稼動範囲を完全に越えていた。
「さっきはアルネちゃんが帰って来て止めちゃったけど、今度は……」
「ムリです。絶対に！ていうか、アルネなら前にいるじゃないですか！」
だんだんと顔を近づけてくるアルカディアに抵抗するように、司は足をバタつかせる。しかし、そんなものは無意味に等しい。やがて、足も押さえ付けられてしまう。
すると、なぜだかアルカディアの目がだんだんと潤んでくる。
「ど、どうしたんですか？」
司は男だ。それも恋愛経験値０の。となると、女性の突然の涙にどう対処したらいいか分からない。とにかく、戸惑うことしか出来なかった。
「だって、ツカサは私のこと嫌いなんでしょ」
司の手を押さえ付けるていた手を離す。そして、溢れ出そうになる涙を拭いながら、アルカディアはそう言う。
その姿に、司は果てしない罪悪感に襲われていた。なにせ、こんなシチュエーション初めてだったから。
「その……嫌いもなにも、今日知り合ったばっかりじゃないですか」
アルカディアの目から、さらに涙が溢れ出てくる。
「じゃあ、ツカサは知り合ったばっかりの女の子には絶対、手を出さないの？」
「知り合ったばっかりじゃなくても、女の子に手は出しません！」
必死になって司は言う。
ちなみに、さっき言った「出しません」は正確に言うと「出せません」だ。司にそんな勇気は無い。
すると、涙を目に一杯溜めていたアルカディアが、一転、満面の笑みになる。
「合格よ、それも満点で！」

アルカディアは司から離れ、ぱちぱちと拍手する。
その状況を理解でない司は、かなり動揺していた。
「えええっと、ななな、なにがですか？」
司の声は震えている。
「お兄ちゃん適正試験よ。そんな見ず知らずの人に、アルネちゃんをまかせれる訳ないでしょ」
アルカディアの言うことはもっともだった。しかし、適正試験がなんのことか司には分からない。
そんな司に、アルカディアは笑いかける。
「いままでのはね、全部お芝居だったの。ツカサが女の子を襲うような人じゃないか確かめるための」
その言葉を聞いた瞬間、司の頭が高速回転を始めた。
いままでのアルカディアの言動や様子が司の頭に、一気に蘇る。
そして、それを一つ一つ丁寧に確認する。
司が目を覚ましたら、親子のスキンシップだと言って抱き着いて来たこと。
無視をしたという理由で不自然なまでに怒りだしたこと。
自分の為に沢山魔法を使ったからと言って、キスを迫って来たこと。
そのアルカディアの不思議な行動全てが、司の頭の中で、線と線で繋がる。
「ごめんね～、騙しちゃって」
目の前であどけなく笑う美しい女性。そうだよね、こんな人が僕に言い寄ってくる訳ないよね――司はがっくりと肩を落とす。
さっきまでは嫌がっていたけど、実際こんな美人に言い寄られて嬉しくないはずがない。
「別にいいですよ……」
司は１６才にして、初めて女性の恐ろしさを知った。

第2話　合格（後書き）

感想くれると嬉しいです。

第3話　ガテイスト学園　1

馬車に揺られること3時間。司はその間、足を抱え込んだ体勢でずっと落ち込んでいた。
その原因は、今司の隣で熟睡しているアルカディアだ。
司は初めて女性に言い寄られて、戸惑い半分、嬉しくもあった。しかし、今は女性に対する恐怖感でいっぱいだ。このことは、完全にトラウマになるだろう。
そして、相変わらず無関心なアルネは、本を読みながら手綱を引いている。
司はそんなアルネの姿を見ると、大きくため息を付く。
アルネだって大人しそうに見えて、どうせ心の中では僕のことをキモいとか思っているんだろうなぁ。そうだよ、どうせ僕は永遠に独り身だよ。バレンタインだって母親以外に貰ったことないし……。
そんな卑屈な考えが司の頭を支配する。
ただでさえアルカディアの一件で低かった司のテンションは、崖を転がり落ちるように下がっていく。そのせいか、司の周りだけ薄暗く感じる。
「はぁ……」
司は再び大きくため息を付く。出発した時から数えると、５０回は軽く越えているだろう。
そんな時、急に馬車が止まる。すると、アルネが振り向く。
「着いた」
その小さな声に、熟睡していたアルカディアが目を覚ます。
一方で司はその声に気付いていないようだ。なにかを呪文のようにぶつぶつと呟いている。たぶん、卑屈な言葉だろう。
そんな司の気持ちを知らないアルカディアは、不思議そうに司を覗き込む。
「どうしたの、ツカサ？着いたみたいだよ」

「……夢の中くらい、いい思いしたっていいじゃん」
今の司には、アルカディアの声も聞こえないようだ。というよりも、聞きたくないのかもしれない。それほど、うぶな司の心の傷は大きかった。
「ほら、ここは現実だから。着いたみたいだから、早く着替えて」
アルカディアは司を無理矢理立たせる。そして、木綿のズボンを脱がし学生ズボンを着せ、上着は木綿の服の上から着せる。
さすが母親といったところで、その作業に全く躊躇はない。あっという間に、普段学校へ通う姿となる。
「うん。カッコイイわよ、ツカサ」
そう言うとアルカディアは、司の頬に思い切り平手打ちをかます。
パァンと鈍い音が馬車の中に響き渡る。
「いったぁっ？」
自分の世界に入り込んでいた司が、強引に現実に引き戻される。司は突然のことに慌てひためく。そして、呆然と真っ赤になった頬を押さえる。
「ななな、なにするんですかっ？」
「いいから、いいから～」
「はぁっ？」
アルカディアは司の手を引き、馬車の外へと出る。すると、そこには退屈そうに空を眺めるアルネがいた。その手には古ぼけた本が握られている。
「お待たせ、アルネちゃん」
「うん」
「じゃあ、行こ！」
そう言うと2人は並んで歩き始める。その姿は親子というより友達同士にしか見えない。
司は手を握られてない方の手で頬を押さえながら、2人の少し後ろを歩く。

少し歩くと周りを森に囲まれた、石積みの巨大な壁が見えてくる。
そこにはお城ような飾りは無い。あるのは壁の上に建てられた矢倉だけ。ただ石が積まれた大きな壁がずっと続いている。そして、その石の壁には、３ｍくらいある大きな扉があった。
学園というのは、中世ヨーロッパのお城のような場所だと司は思っていた。しかし、今目の前にあるのは、お城というよりは、要塞。
司はその異様な雰囲気が漂う要塞に圧倒される。
「どう、すごいでしょ？」
アルカディアは自慢げに言う。
アルネも司も言葉は出さずに、ゆっくりとうなずく。そんな２人の手を引いて、アルカディアは扉へと向かう。
その扉の前に着くと、アルカディアはポケットから２つの鍵を取り出し、それをアルネと司に渡す。
「行てらっしゃい」
アルカディアはぎゅっとアルネを抱きしめる。
「行ってきます」
アルネがそう言うとアルカディアはアルネを放す。２人共、目からは涙が溢れ出そうだった。
そんなアルカディアが涙を拭いながら司の方を向く。
「アルネちゃんを頼んだからね」
未だに状況をつかめてない司はただうなずく。
アルカディアは再びポケットから何かを取り出すとそれを司に渡す。それは、黒いガラス珠のような物が付いた指輪だった。
司は「これはなんですか？」と聞こうと思ったのだが、突然アルカディアに背中を押される。
「ほら、早く行く！」
気付くとアルネもう扉の前に立っていた。しょうがないので司も扉へと向かう。
アルネは司が来たことを確認すると、大きな扉に開いた、小さな鍵穴を指差す。

「ここに鍵」
そう言うとアルネは扉の前を退く。先に司が行けということだろう。
それに気付いた司は、アルネの言った鍵穴に自分の鍵を差し込む。しかし、鍵を右にも左にも回すことが出来ない。
「……この後どうすればいいの？」
「もう通れる」
「え、でも？」
「いいから」
扉が閉まっているにも関わらず、アルネは司を思い切り突き飛ばす。
「うわぁっ？」
司の体は扉に吸い込まれるように、その場から消える。すると、鍵穴に刺さっていたはずの鍵も消えてしまう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2441c/

アルネの譜面

2010年10月11日00時10分発行